多賀城市文化財調査報告書第51集

西　沢　遺　跡

—第４次調査報告書—

平成10年３月

多賀城市教育委員会

序　　文

多賀城市は、奈良時代に陸奥国府が置かれて以来、約1,300年という長く、豊かな歴史に培われたまちです。現在本市には、いわゆる「遺跡」と呼ばれる埋蔵文化財包蔵地が37ケ所確認されています。そして、その面積は約403万m²におよび、これに特別史跡多賀城跡の指定地の面積を加えると実に市の総面積の約1/4を占めることになります。このように数字だけを取り上げても本市にとって遺跡の存在は大きな意味を持つわけで、まして、将来のまちづくりや文化の向上発展を目指すうえで、遺跡のはたす役割は決して軽いものではないと思われます。

さて、本市に所在する37ケ所の遺跡の一つである西沢遺跡は、多賀城跡の東側に隣接するという重要な位置にあります。現に、これまでに行われた3度の調査では、国府多賀城と強い関連がうかがえる多くの遺構、遺物が発見されています。今回の第4次調査においても、奈良・平安時代から中世をへて、現代まで連綿と続く人々の足跡が発見されました。これらは国府の時代だけでなく、実際はその後も重要な地として存続した多賀城跡の歴史と軌を一にするものです。

本遺跡での調査は、今後も継続して実施される予定です。一度の調査は小規模なものでも、それらの調査成果の積み重ねは本遺跡の解明につながり、ひいては多賀城市全体の歴史の解明にも結びつくと期待されます。

最後に、発掘調査の実施や本報告書の刊行にあたり、多大なご協力をいただきました多くの方々に対し厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

多賀城市教育委員会

教育長　櫻　井　茂　男

目　　次

Ⅰ　遺跡の立地と歴史的環境……1
Ⅱ　調査に至る経緯……1
Ⅲ　調査方法と経過……3
Ⅳ　調査成果……4
Ⅴ　ま と め……17
写真図版……18

例　　言

1. 本書は平成９年度に国庫補助事業として実施した西沢遺跡第４次調査の成果をまとめたものである。
2. 遺構の名称は第１次調査からの連番号である。
3. 本書中の遺構の分類記号は次のとおりである。

　　ＳＢ：建物跡　ＳＤ：溝跡　ＳＫ：土壙　ＳＸ：その他

4. 方位の表示は座標北を示している。また、本書挿図中水糸レベルは標高値を示している。
5. 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参照した。
6. 本書の執筆・編集は、石本 敬、鈴木孝行、堀口和代が行った。
7. 遺物整理及び実測図作成の作業においては、伊藤美恵子、浦風志恵子、鹿野智子、須藤美智子、陶山喜美栄、中村千恵子、村上和恵、渡邊奈緒の協力を得た。
8. 調査、整理に関する諸記録及び出土遺物は全て多賀城市教育委員会が保管している。

調　査　要　項

遺　跡　名　西沢遺跡（宮城県遺跡登録番号18017）
調　査　地　宮城県多賀城市市川字伊保石地内
調査面積　約400m²
調査期間　平成９年７月14日～９月12日
調査主体　多賀城市教育委員会　　教育長　櫻井 茂男
調査担当　多賀城市埋蔵文化財調査センター　所　長　木村 忠雄
調　査　員　石本 敬、鈴木孝行、堀口和代
調査協力者　佐藤丑之助、佐藤信男
調査参加者　赤間かつ子、赤井ひろ子、阿部胞吉、阿部敏子、阿部美智子、内海義男、遠藤一代、遠藤実、長田栄太郎、小野玉乃、加藤正士、日下正夫、後藤しのぶ、今野和子、今野孝男、桜井エイ子、佐々木欣哉、菅原絹代、菅原吉明、鈴木寿二、田中ミヨ、田中裕子、千葉享一、早坂剛、星忠次郎、星秀雄、松本喜一、宮川ハルミ、山田吉之助、渡辺幹子、渡辺ゆき子

I　遺跡の立地と歴史的環境

西沢遺跡は、特別史跡多賀城跡の東側に隣接し、東西約450m、南北約700mの範囲で低丘陵の南斜面に占地する。この丘陵は、陸前丘陵のひとつである松島丘陵から派生し、塩竈市方面から西へ延び多賀城市北部に達して終わる標高50～60mの低丘陵である。本遺跡は、この丘陵の南西端付近に立地し、標高は丘陵尾根部近くにあたる北側で約46m、沖積地と接する南側で約６ｍを計る。全体としては大小の沢状の地形が入り込み、起伏に富んだ景観を呈する。

次に本遺跡周辺に所在する遺跡についてみると、本遺跡の西側一帯には古代陸奥国の国府が置かれた多賀城跡が所在する。また、東側には奈良・平安時代を中心とする遺物が散布する法性院遺跡と高原遺跡が南北に並んで位置する。多賀城跡については、今回の調査区の西側約100mの位置で平安時代の外郭東辺にあたる築地塀跡が南北方向に延びている。さらに、その西側には城内最大の規模をもつ大畑地区の官衙地域が広がっている。

一方、本遺跡内でも今までに３度にわたる発掘調査を実施しており、特に平成７年度に実施した第３次調査は、本調査区の東側の近接地で行っている。この調査では、平安時代の鍛冶工房跡を含む14棟の竪穴住居跡を検出した。また、中世の井戸跡、溝跡、多数の柱穴等の遺構も発見している。出土遺物は縄文時代、奈良・平安時代、中世の各時代にまたがり、中でも平安時代では羽口、鉄滓、鍛造剝片等の鍛冶関連の遺物や、灰釉・緑釉陶器、硯、石帯といった隣接する多賀城跡との関連をうかがわせるような遺物が出土している。

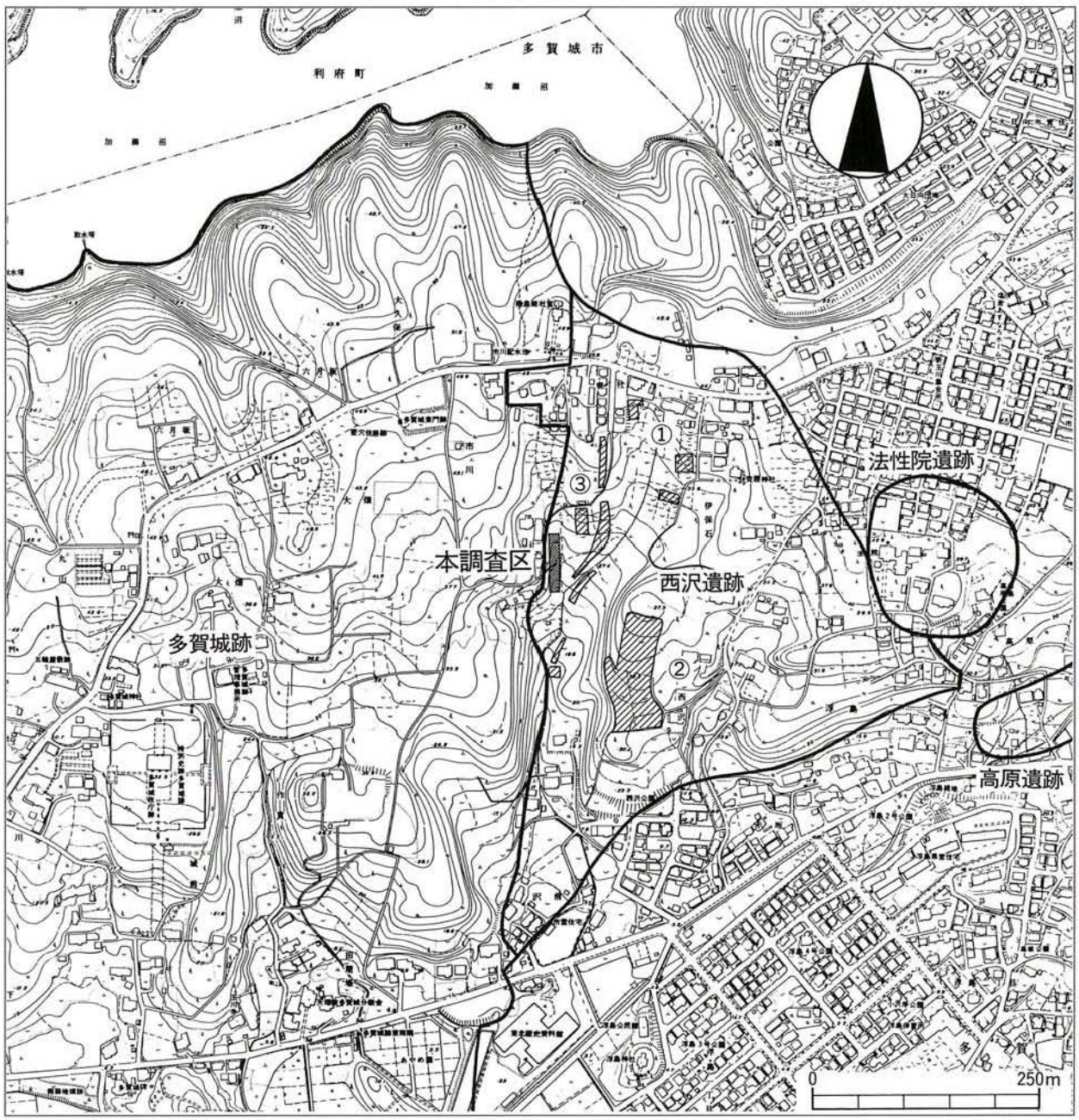
このほか、周辺の歴史的環境を考える上で重要なものとして、本遺跡の北端付近に位置する陸奥国総社の後身かと考えられる奏社宮、さらにこの東約2.5kmに位置する奥州一の宮塩竈神社があげられる。旧塩竈街道は、城内を南西から北東に斜めに貫通し、東門跡の脇を通って奏社宮、塩竈神社へと続いており、古代にもこういった尾根を通る道があったと考えられる。

II　調査に至る経緯

多賀城市では、国の特別史跡である多賀城跡において、史跡の適正な保存と活用を図るため昭和38年から指定地内にある民有地の公有化を推進している。そして、公有化した土地については、広く市民が歴史的環境を体験し、学び、憩うことのできる遺跡博物館的空間としての活用を目標に、歴史公園化の整備を行ってきている。しかし、この実現のために避けて通れない課題の一つに、一部地域住民の家屋の移転という問題があげられる。特別史跡は文化財としての歴史だけを抱えているのではなく、そこには多くの住民が生活を営んでおり、市民生活としての時間の積み重ねも同時に存在していることを考慮しなければならない。したがって、地域住民の理解を促進し、住民生活との調和のとれた整備を行っていくことが不可欠であるといえる。

さて、今回の調査の契機は多賀城市市川字伊保石地内の西沢遺跡の包蔵地内で個人住宅建築の意向が地権者より示されたことによる。この開発は早急に実施されるという性格のものではなく、特別史跡内に自宅を所有する地権者が前述したような史跡の公有化事業を念頭に入れ、将来の移転先として指定地外にある当該地を利用したいというものである。これについて当市教育委員会文化財課では、地権者の意向を何より尊重し、さらに発掘調査の実施を視野に入れて、埋蔵文化財調査センターを交えて協議、検討を行っ

た。その結果、多賀城跡に隣接しその関連遺構がこれまでに発見されているという当地域の重要性から、調査は多賀城跡周辺地域の遺跡内で発生する小規模開発に対応するために設けている国庫補助事業の一環として行うこと。また、対象面積の広さや現在畑として利用されている当該地の作付けの状況等を考慮して、複数年度に分けて発掘調査を実施することとした。これを受けて当センターでは、その１年目の調査として平成９年７月14日から２ケ月の調査期間の予定で発掘調査を実施したものである。



	調査年次	調査地区	発見遺構	年代	原因
①	第１次調査 (平成２年度)	市川字伊保石地内	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、土壙	奈良・平安 中世	確認調査
②	第２次調査 (平成６年度)	浮島字西沢地内	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、柱穴列、溝跡、土壙	平安時代 中世	宅地造成
③	第３次調査 (平成７年度)	市川字妻社・伊保石地内	竪穴住居跡、鍛冶炉、石組み炉、柱穴、溝跡、土壙、井戸跡	平安時代 中世	道路建設

第１図　調査区位置図

III　調査方法と経過

今回の調査の対象地は、多賀城跡の東端を区画する築地塀跡が立地する台地状の高まりが、東側に落ちきった付近に位置する。この場所は、地形図上では南東側に傾斜する沢状の地形の底面付近にあたる。しかし、東側一帯については多少の起伏はあるものの緩やかな斜面が広がり、反対側である多賀城跡側ほど当該地との高低差は感じられない。したがって、本調査区の立地を一つの地形的なまとまりとしてみれば、南側でせばまる扇形の平坦な斜面の西端付近に位置するといえる。

調査にあたっては、地権者の意向を受け対象地の西側に生活道路をはさんだ北と南の２ケ所に調査区を設定した。そして、便宜的に北側をＡ区、南側をＢ区とした。また、Ａ区の南端に実測図作成等のための原点（Ｘ＝－188,040m、Ｙ＝14,289m）を設定し、これを通る南北方向の直線を南北基準線、それと直交する東西方向の直線を東西基準線とした。さらに、原点を０として調査区内に３ｍの方眼を組み、南北方向は原点から北をＮ、南をＳとして原点から１ｍ離れるごとにＮ１、Ｎ２、Ｎ３…、Ｓ１、Ｓ２、Ｓ３…と表した。東西方向は原点から東をＥ、西をＷとして同様に表した。

調査は、平成９年７月14日から開始し、最初に重機による表土除去を行う。表土の厚さは、Ａ区北側で約５cm、標高が約5.4m下がったＢ区南側で約30cmを計る。一部の場所を除き表土の下が基本層位の第III層とした土層で、その上面が遺構確認面である。第III層は、Ａ区の東半部とＢ区の全域で確認でき、一方Ａ区の北西部では表土の下が直接岩盤となっている。また、Ａ区の南西部では基本層位の第IV層と第Ｖ層の堆積が認められ、これらは調査区東側に向かって徐々に落ち込み、第III層の下に入り込んでいく様相をみせる。以上のような土層の堆積状況は、表土除去後に排水及び土層確認のために調査区の壁沿いに設けた側溝を掘り込んだ段階で確認した。17日からは、両区でほぼ並行して遺構検出作業を実施した。その結果、両区とも調査区東側で南北方向に延びる比較的規模の大きな溝跡の重複が確認できた。これらの溝跡は、東端が調査区外にかかるため全体の規模等は把握できなかった。これ以外の検出遺構では、Ａ区北西部で南北方向に規則的に配列された柱穴列と、Ｂ区北側で小柱穴のまとまりを確認した。それぞれ、その広がりをみるために調査区の拡張を行った。前者については、南東側が後世の削平のため不明であったが、南北列のほか北側でこれと直交する東西列を確認したことから掘立柱建物跡であると判断した（ＳＢ398建物跡）。後者については、同一位置で何度か建物等の建て替えが行われたとみられるが、建物跡として組み合ったものは１棟であった（ＳＢ399建物跡）。また、ＳＢ398建物跡は岩盤上、ＳＢ399建物跡は第III層上面での確認であり、双方の柱穴の形態や規模も異なることから前者はおおよそ奈良・平安時代、後者は中世に属すると推測された。検出した各遺構は、24日から掘り込み調査を行い、その都度写真撮影、実測図作成等の一連の作業を繰り返した。まず、Ｂ区における一番新しい時期の溝跡であるＳＤ387溝跡は、その出土遺物から近・現代のものと判明した。次いで、これによって壊されるＳＤ388溝跡については、２時期の変遷のある中世の溝跡であることを確認した。Ａ区検出の各溝跡も、新しい時期のものから順次掘り込み調査を行い、ＳＤ382～384溝跡は出土遺物等から中世に属すると考えられた。これらの結果から、第III層上面から掘り込まれている遺構は、全て中世以降のものであるという見解が得られた。中世の溝跡の調査については８月22日でほぼ終了し、引き続きＢ区においては北側で検出したＳＢ399建物跡の各柱穴の断ち割り等の調査と、調査区中央付近で検出した方形の土壙（ＳＫ394～397土壙）の調査を行った。Ａ区では、ＳＢ398建物跡の詳細な調査を行い、同位置で建て替えがあったことを確認した。これと並行して調査区東半

部に堆積している第III層を除去したところ、新たに2条の溝跡(ＳＤ385・386溝跡)を検出した。これらは、出土遺物等から平安時代の遺構と判断された。以上のことから、今回の調査区の東側一帯には古代から近・現代にかけて沢状の旧地形を利用してつくられたと考えられる多くの溝跡が重複することが判明した。その後、検出遺構の調査をほぼ終了した9月4日からは、Ｂ区の南壁沿いにサブトレンチを設け土層の堆積状況を観察した。この付近では第III層は厚く堆積しており、上面から約70cm下の第III層下層で奈良時代の遺物が数個体まとまって出土した。したがって、Ｂ区における奈良・平安時代の地形は南側に向かって現状よりも急な傾斜で落ち込み、その後に堆積土が厚くたまっていると考えられた。本来なら堆積土を除去し古代の遺構の検出作業を行うところであるが、そうした場合中世の遺構を全て壊すことになることや、調査終了後はＢ区付近は将来の住宅建設に向けて厚く盛土を行うという地権者の意向があることから、今回は上面の遺構までの調査にとどめることにした。調査は、続いて最終的な写真撮影、図面作成等を行い、また遺構等の埋め戻し作業を行い9月12日をもって終了した。

IV 調 査 成 果

1 層 序

本調査区は、北西から南東にかけて落ちる斜面上に立地している。Ａ区北西部では、表土の下が岩盤になっており堆積層が認められず、後世の削平を受けたものと考えられる。以下各層について記述する。

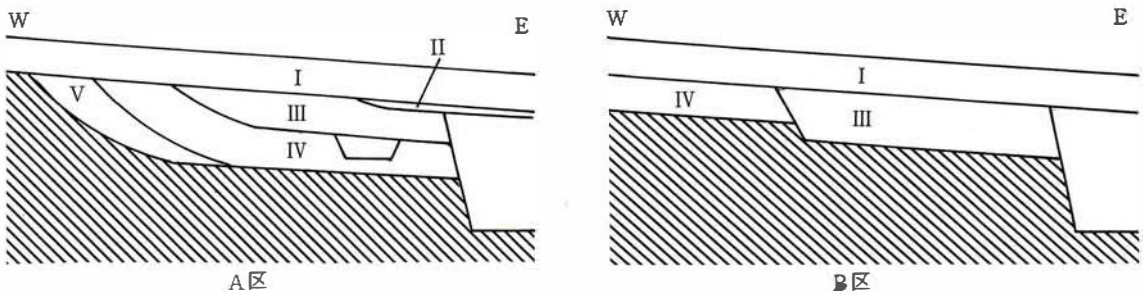
第Ｉ層　現在の表土である。

第II層　Ａ区南東隅のみに分布する、にぶい黄褐色(10ＹＲ4/3)シルトである。第Ｉ層直下で認められた自然堆積層で、厚さは約10cmである。

第III層　Ａ区・Ｂ区共通に堆積しており、にぶい黄褐色砂質シルトを主体とした堆積層である。Ａ区では東半部で確認しており、ＳＤ385・386溝跡の最上層にも堆積している。Ｂ区ではほぼ全域で確認した。第IV層を削って堆積しており、沢或いは大溝の埋土の可能性も考えられる。

第IV層　Ａ区・Ｂ区共通の自然堆積層で、黒褐色シルトを主体としている。遺物は含まない。厚さは約15～35cmである。

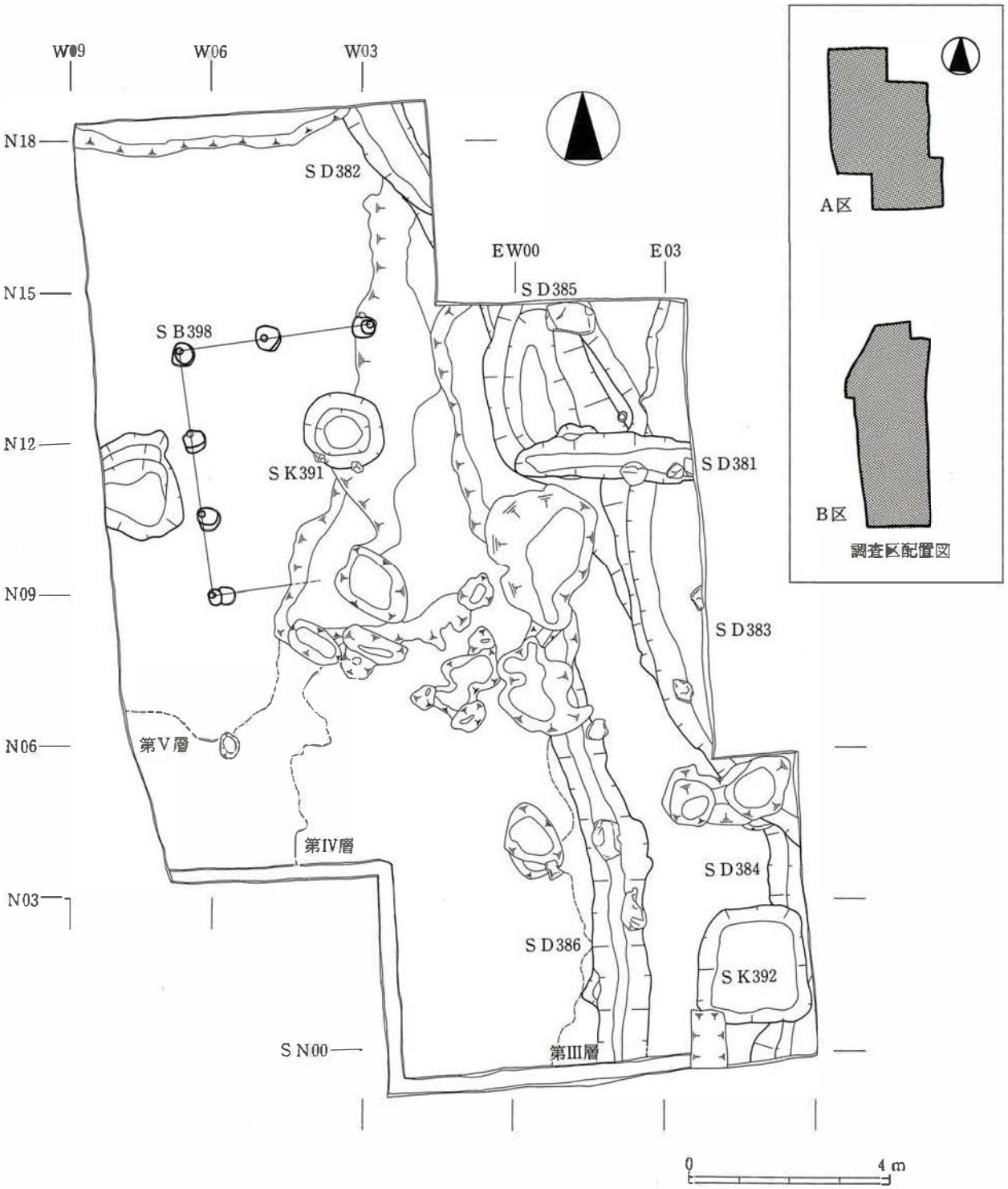
第Ｖ層　Ａ区南西部で確認された、黒色(10ＹＲ1/2)シルトである。地山の上に堆積し、地山粒を若干含む。遺物は全く含まない。厚さは約20cmである。なお、東側に向かうにしたがって第IV層、第Ｖ層の境が不明瞭となる。



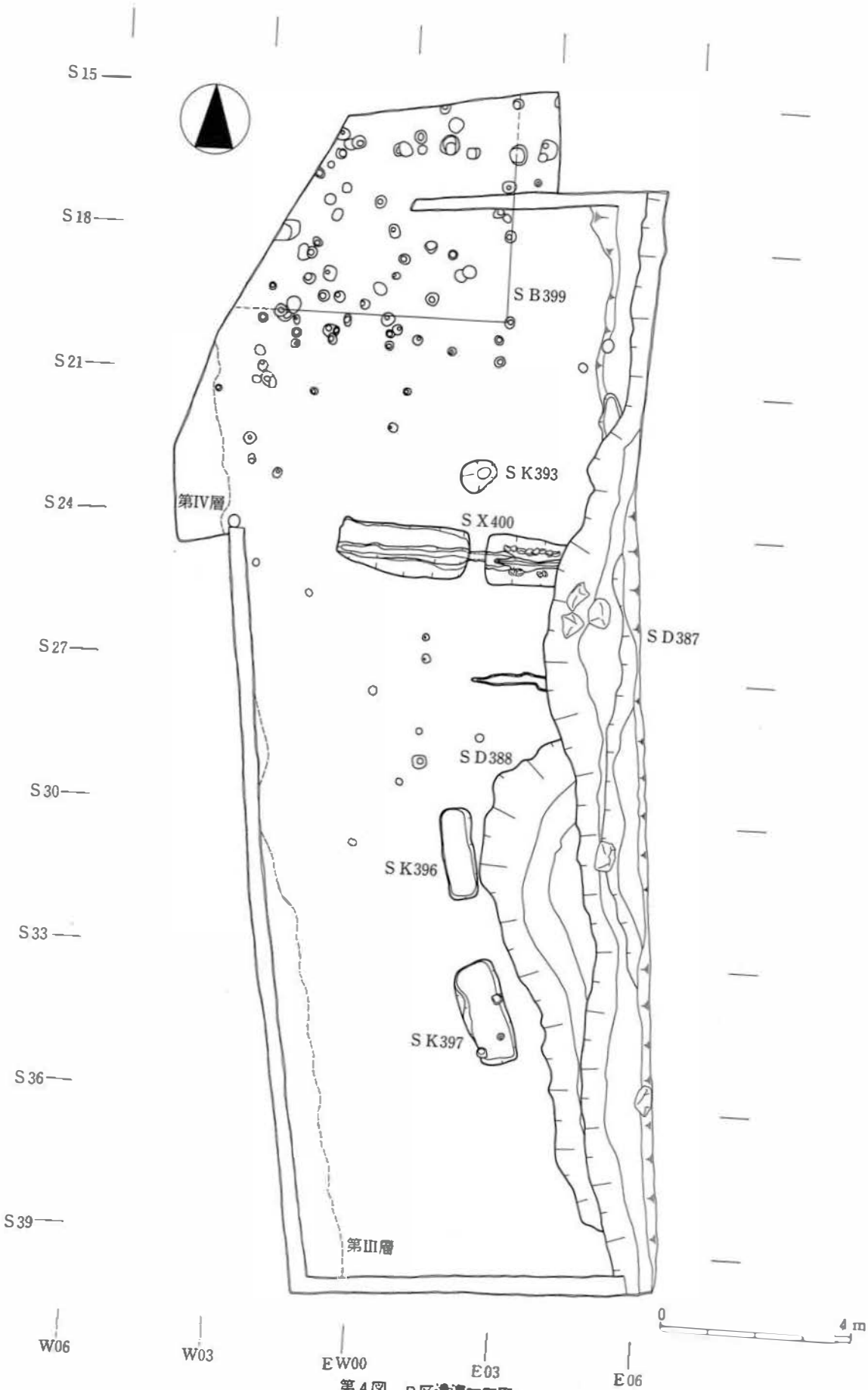
第2図　層序模式図

2　発見した遺構と遺物

今回の調査で発見した遺構は、掘立柱建物跡２棟、溝跡８条、土壙５基、性格不明遺構１基である。以下、地区ごとに説明する。



第３図　Ａ区遺溝配置図


S15
S18
S21
S24
S27
S30
S33
S36
S39
W06
W03
EW00
E03
E06
0
4 m
SB399
SK393
SX400
SD387
SD388
SK396
SK397
第IV層
第III層

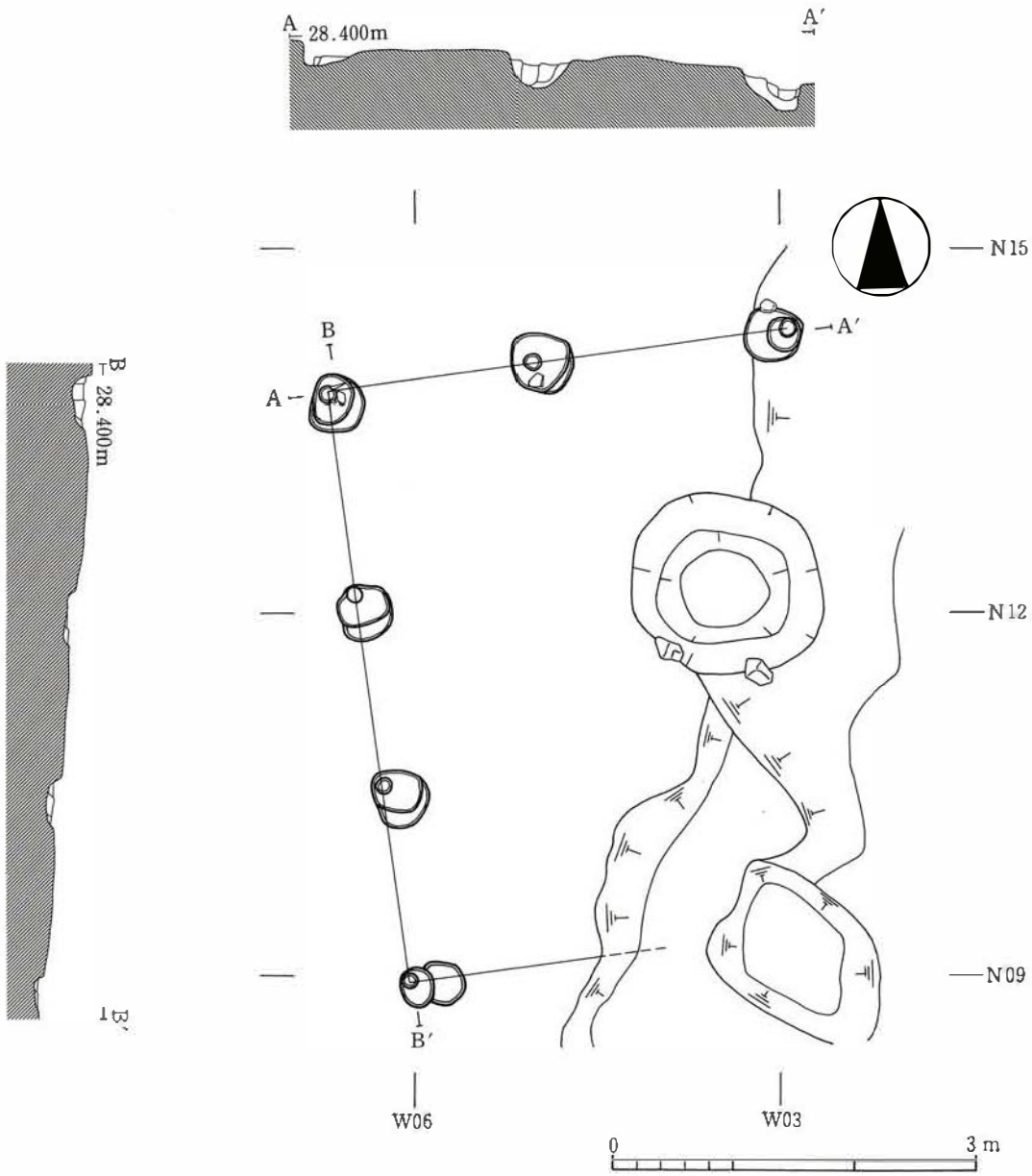
第4図　B区遺構配置図

A区

(1) 掘立柱建物跡

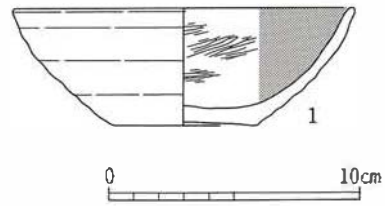
ＳＢ398建物跡

Ａ区北西部の地山及び岩盤上で検出した掘立柱建物跡である。南東側で後世の掘削が著しいため、北側柱列２間分と西側柱列３間分のみの確認で、全体の正確な規模等は不明である。しかし、現地形の傾斜や確認した柱穴の底面の深さから推測すると、東側と南側にさらに延長するとは考えにくい。したがって、東西２間、南北３間の南北棟建物跡である可能性が高い。この場合、ＳＫ391土壙と重複することになるが、直接の切り合い関係は確認できなかった。残存するすべての柱穴で２時期の変遷（Ａ→Ｂ期）が認められたことから、同一位置で建て替えが行われたと考えられる。このうちＡ期については、後続するＢ期の各柱



第５図　ＳＢ398建物跡実測図

穴によって大部分が壊されているため詳細は不明である。そのため、ここでは主にB期について述べることにする。まずB期の各柱穴は、そのすべてで柱痕跡が確認できた。これをもとに方向を見ると、西側柱列では北で８度西に偏している。北側柱列でもほぼ同様の傾きである。柱間は、西側柱列で北から1.66m、1.59m、1.61mであり、北側柱列で西から1.72m、2.14mである。柱穴掘り方の平面形は、不整形で一定ではないが、方形に近いものが多い。規模は、上部の削平が著しい西側柱列南端の柱穴を除き、一辺30～48cmである。柱は、柱痕跡で見ると径14cm前後の円形である。また、掘り方の埋土は各柱穴とも単層であるが、北西隅柱穴のみ木炭等の混入物を含む。なお、A期についてみると、残存状態の比較的良好な北側柱列の柱穴において、柱の抜き取りが行われた可能性を示す痕跡が認められる。遺物は、北西部付近の柱穴掘り方から土師器杯（第６図１）・甕、須恵器甕、丸瓦が出土している。このうち、土師器杯については底部が残存している個体が３点出土しており、いずれも回転糸切りによって切り離し、再調整をもたないものである。なお、北西隅柱穴では柱痕跡を囲むように瓦等の比較的大きな遺物片が配置されており、柱を建てる際にその補強等の目的で意図的に用いられたとも考えられる。



単位：cm

番号	種類	器種	層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	図版番号	備考	登録番号
1	土師器	杯	柱穴掘方	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	13.6	5.9	4.7	6-1	口縁 部油煙付着	R12

第６図　ＳＢ398建物跡出土遺物

⑵　溝跡

ＳＤ381溝跡

調査区東部の第Ⅲ層上面で発見した東西に直線的に延びる溝跡である。ＳＤ383・385溝跡と重複し、これらより新しい。東端は調査区外へ延びており、確認した長さは約3.5mである。上幅は0.7～0.9m、下幅0.3～0.4m、深さ約0.28mの規模である。断面形は半月状である。埋土は上層で細かく分けられ、その状況から自然堆積と思われる。遺物は上層から土師器、須恵器が出土している。

ＳＤ382溝跡

調査区北東隅の第Ⅲ層上面で発見した南北に延びる溝跡である。ＳＤ383溝跡と重複しこれより新しい。両端は調査区外に延びており、確認した長さは約２mである。上幅は0.9～1.1m、下幅は0.4～0.7m、深さ0.18mである。断面形は半月状で、埋土は黒褐色シルトを主体としている。遺物は土師器、須恵器、赤焼き土器が出土している。

ＳＤ383溝跡

調査区東端の第Ⅲ層上面で発見した南北に延びる溝跡である。西側部分しか確認できず全容は不明である。ＳＤ381・382・384・385溝跡と重複し、ＳＤ384・385溝跡よりも新しく、ＳＤ381・382溝跡より古い。２時期の変遷（Ａ→Ｂ期）が認められる。

Ａ期…規模は、上幅2.1m以上、下幅1.8m以上である。深さ・断面形はＢ期と重複するため不明である。埋土は暗褐色シルトを主体としている。遺物は土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器が出土している。

Ｂ期…規模は、上幅1.5m以上、下幅1.0m以上、深さ0.98mである。断面形は半月状である。埋土は上層に酸化鉄斑、最下層に石を多量に含んでいる。遺物は青磁碗（龍泉窯系）（第８図７・８）、白磁、かわらけ（第８図１）、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、緑釉陶器、砥石（第８図11）、瓦（第８図９）、鉄

釘（第８図10）が出土している。

ＳＤ384溝跡

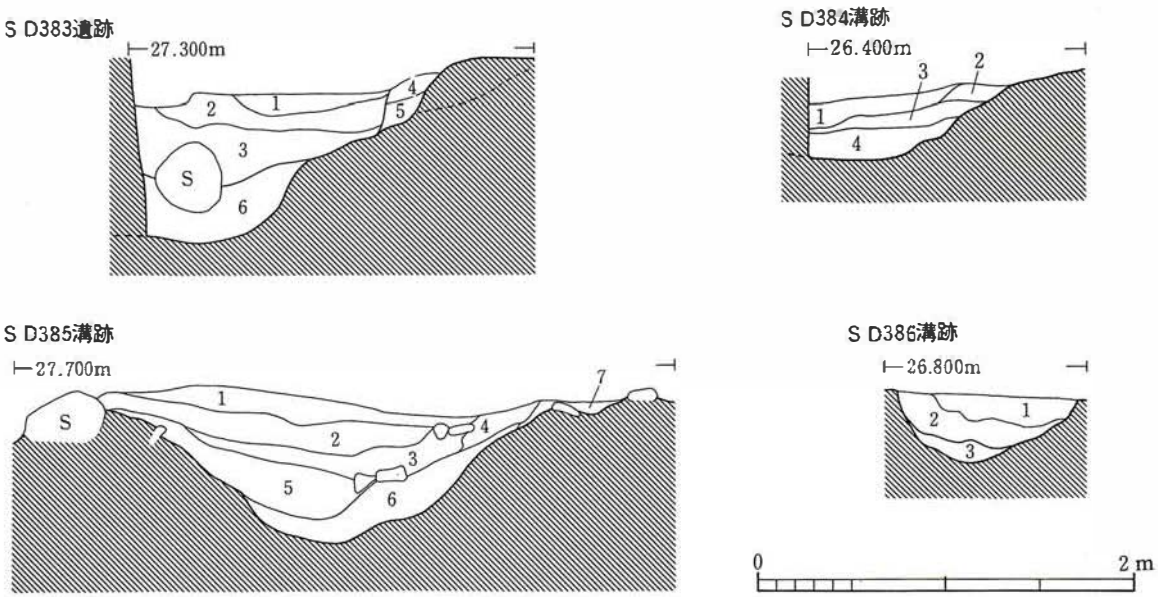
調査区南東隅の第III層上面で発見した南北に延びる溝跡である。西側部分しか確認できず全容は不明である。ＳＤ383溝跡、ＳＫ392土壙と重複し、いずれのものよりも古い。規模は、上幅1.4m以上、下幅0.5m以上、深さ0.4mである。断面形は半月状で、埋土は最下層に石を多量に含んでいる。遺物は土師器、須恵器、赤焼き土器、緑釉陶器が出土している。

ＳＤ385溝跡

調査区東部の第IV層上面で発見した東にやや彎曲した溝跡である。ＳＤ381・383溝跡と重複し、いずれのものよりも古い。規模は、確認できた箇所で上幅1.8～2.6m、下幅0.4m以上、深さ0.84mである。断面形は半月状で、底面に凹凸がみられる。埋土は上層で細分でき、そのうちの一層には、灰白色火山灰が斑状に若干含まれる。下層では石や地山粒が多く含まれる。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯（第８図２）・甕、赤焼き土器が出土している。

ＳＤ386溝跡

調査区南部の第IV層上面で発見した南北に延びる溝跡である。南側は調査区外に延びており、確認した長さは13mである。方向は北で約８度西に偏している。規模は、上幅0.7～1.0m、下幅0.2～0.4m、深さ0.39mである。断面形は半月状で、埋土は最下層に礫を含んでいる。遺物は土師器杯(第８図３～６)・甕、須恵器杯・甕・瓶、転用硯が出土している。

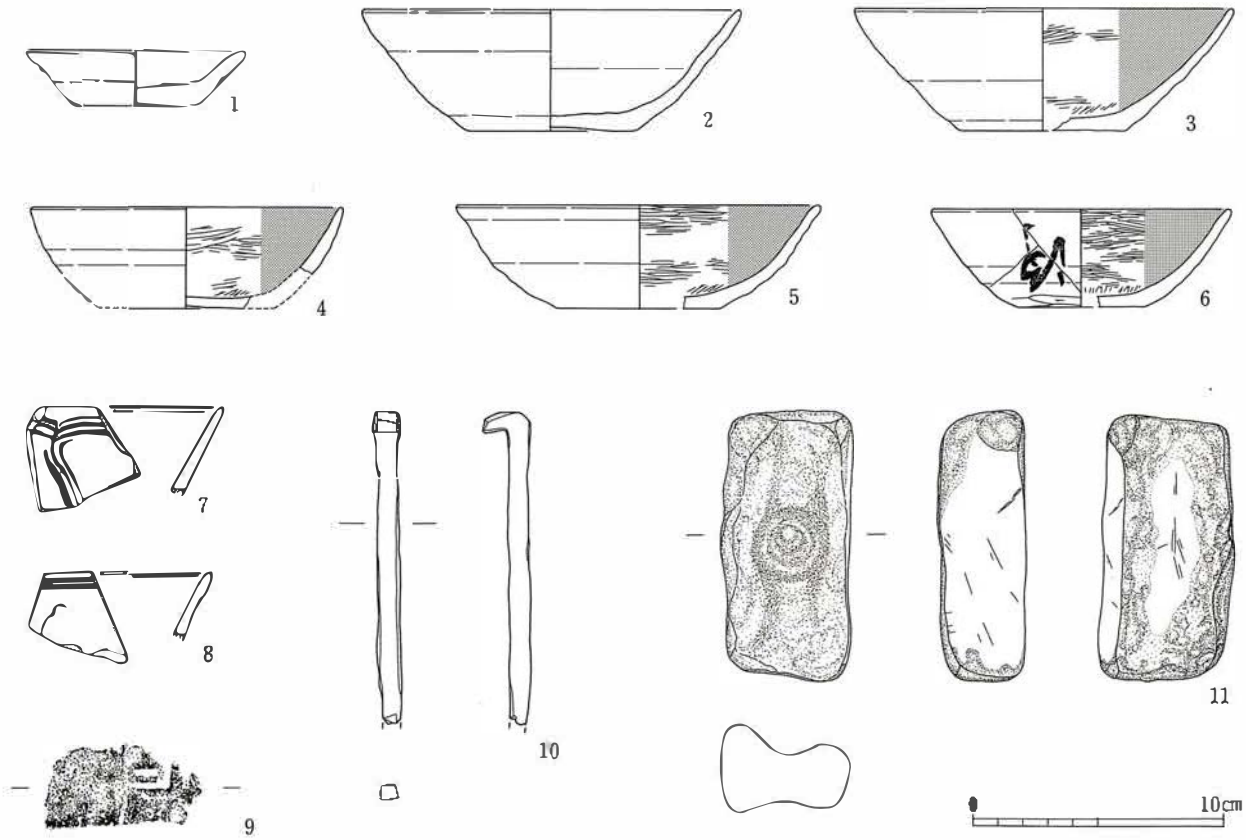


土層観察表

No.	土色	土性	備考	種別
ＳＤ383溝跡				
1	黒褐色(10Ｙ R3/2)	シルト	酸化鉄斑を含む	ＳＤ383 B期
2	黒褐色(10Ｙ R3/1)	シルト	にぶい黄橙色シルトを斑状に若干含む	ＳＤ383 B期
3	黒褐色(10Ｙ R3/2)	砂質シルト	石を多量に含む	ＳＤ383 B期
4	暗褐色(10Ｙ R3/3)	シルト	酸化鉄斑を含む	ＳＤ383 A期
5	黒褐色(10Ｙ R3/1)	シルト	暗褐色シルトを斑状に含む	ＳＤ383 A期
6	黒褐色(10Ｙ R3/1)	シルト	同質の砂質シルトを混入	ＳＤ385 埋土
ＳＤ384溝跡				
1	黒褐色(10Ｙ R3/2)	シルト	にぶい黄褐色シルトを斑状に若干含む	
2	灰黄褐色(10Ｙ R4/2)	砂質シルト	にぶい黄褐色シルトを斑状に若干含む	
3	褐灰色(10Ｙ R4/1)	シルト	にぶい黄褐色シルトを斑状に含む	
4	黒褐色(10Ｙ R3/2)	シルト	同質の砂質シルトを混入	

No.	土色	土性	備考
ＳＤ385溝跡			
1	褐色(10YR4/4)	砂質シルト	地山ブロックやマンガン粒を含む
2	にぶい黄褐色(10Ｙ R4/3)	砂質シルト	土層の下半部に酸化鉄が沈殿している
3	黄灰色(2.5Ｙ 4/1)	シルト	10cm前後の石を含む
4	黒褐色(10Ｙ R3/2)	シルト	灰白色火山灰を斑状に含む
5	褐灰色(10Ｙ R4/1)	シルト	やや大きめの地山粒を含む
6	黒褐色(10Ｙ R3/1)	粘土質シルト	石・やや大きめの地山粒を含む
7	にぶい黄褐色(10Ｙ R4/3)	シルト	径0.5～1.0cmの地山粒を多く含む
ＳＤ386溝跡			
1	にぶい黄褐色(10Ｙ R4/3)	粗砂とシルトの互層	酸化鉄を多く含む
2	暗褐色(10Ｙ R3/3)	シルト	粗砂粒を含む
3	黒褐色(10Ｙ R3/1)	粘土質シルト	小礫を含む

第７図　Ａ区溝跡断面図



単位：cm

番号	器類	器種	遺構	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	図版番号	備考	登録番号
1	かわらけ		SD383 B期	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	8.8	5.0	2.2	7-1		R6
2	須恵器	杯	SD385	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	15.0	6.6	4.8	6-2		R4
3	土師器	杯	SD386	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色処理	15.0	6.6	4.9	6-3	底部不明瞭	R8
4	土師器	杯	SD386	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	12.4	7.0	4.0	6-4	底部不明瞭	R5
5	土師器	杯	SD386	ロクロナデ、底部回転糸切り後手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	14.4	6.4	4.1		内面に付着物	R7
6	土師器	杯	SD386	ロクロナデ、底部等手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	11.9	5.1	4.9	6-5	墨書「浄」	R9
7	青磁	碗	SD383 B期						7-5	内面劃花文(龍泉窯系)	R35
8	青磁	碗	SD383 B期						7-5	内面劃花文(龍泉窯系)	R36
9	丸瓦	SD383 B期/図版7-6/刻書「占」/R84		10 鉄釘	SD383 B期/長さ12.5/図版7-9/R8				11 砥石	SD383 B期/ R90	

第8図　A区溝跡出土遺物

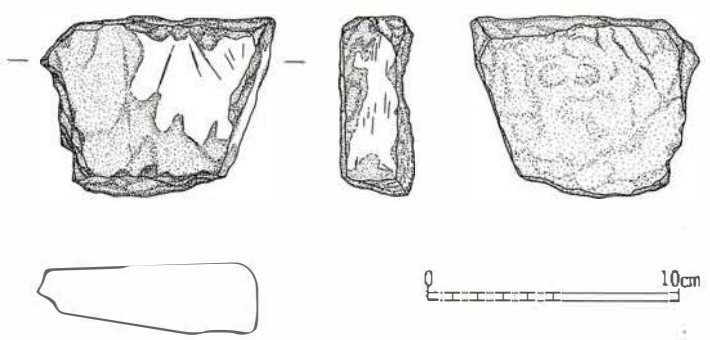
(3) 土　壙

SK391土壙

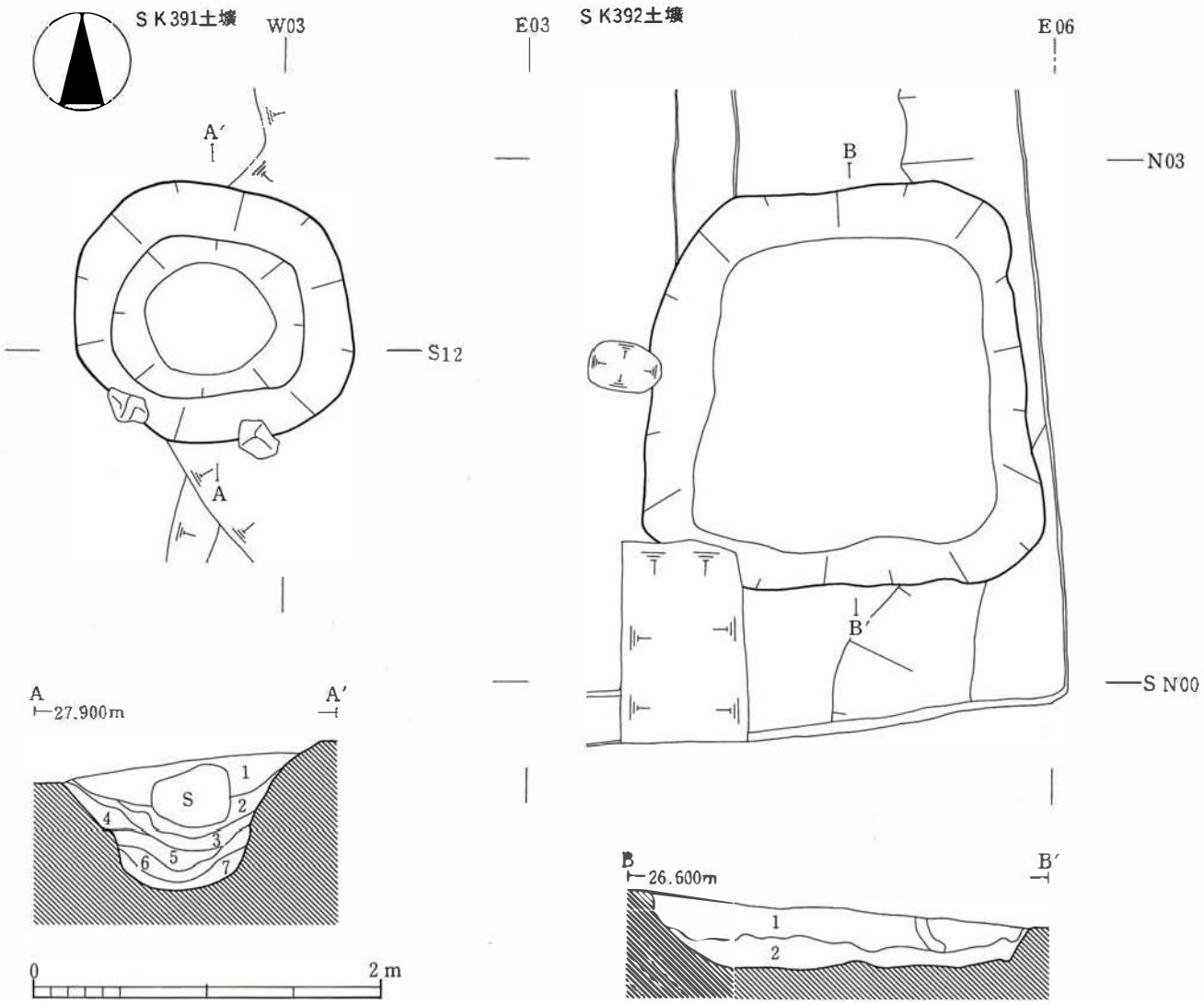
調査区中央部やや北よりの地山上面で発見したほぼ円形の土壙である。他の遺構との重複はない。規模は径1.5～1.6m、深さ0.71mである。埋土はレンズ状に堆積しており、自然堆積と思われる。遺物は土師器、須恵器、砥石(第9図)が出土している。

SK392土壙

調査区南東隅の第III層上面で発見した隅丸方形の土壙である。SD384溝跡と重複しこれより新しい。規模は長軸2.3m、短軸2.2m、深さ0.36mである。埋土は上層に酸化鉄斑を、下層に地山ブロックを微量に含んでいる。遺物は土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土している。



第9図　SK391土壙出土砥石



土層観察表

No.	土色	土性	備考	No.	土色	土性	備考
SK391土壙				6	黒褐色(10YR3/2)	シルト	粘性あり
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト		7	にぶい黄褐色(10YR5/4)	砂質シルト	灰黄褐色シルトを混入
2	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	しまり弱い	SK392土壙			
3	暗褐色(10YR2/3)	砂質シルト	北半部は粘土質の土層になる	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	酸化鉄を粒状に含む
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	やや砂質	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	基本層第III層の土を含む
5	黒色(10YR2/1)	粘土質シルト					

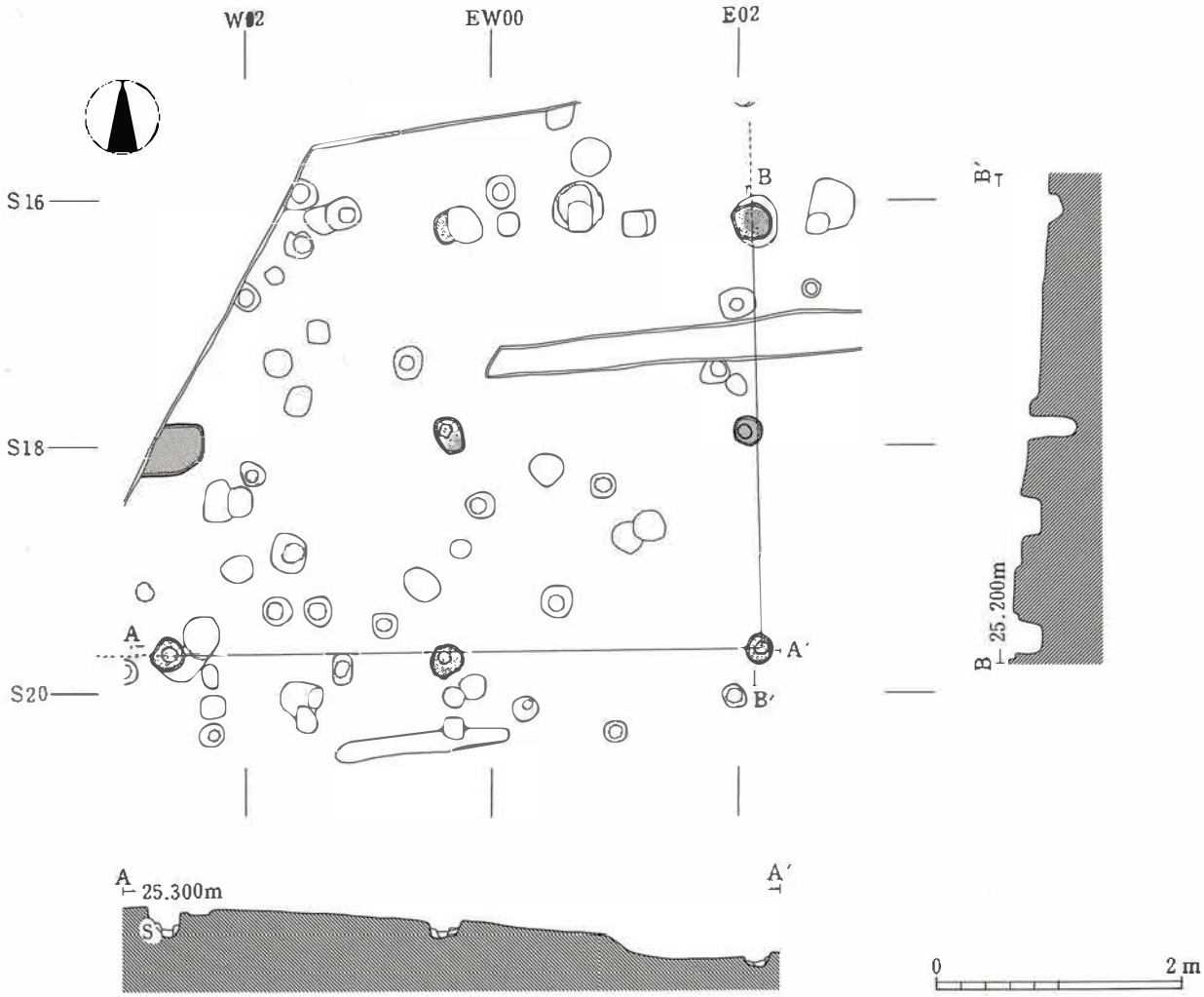
第10図　A区土壙実測図

B区

(1) 掘立柱建物跡

SB399建物跡

調査区北端部で発見した東西2間、南北2間まで検出した建物跡である。柱穴はすべて第III層上面で8カ所発見しており、このうち6カ所で柱痕跡を確認している。規模は南側柱列で確認できた長さで4.79m、柱間は東より2.56m、2.23mで、東側柱列は確認できた長さで3.46m、柱間は北より1.71m、1.75mである。柱穴は直径0.15～0.30mのほぼ円形で、深さは0.15～0.45m残存している。柱痕跡は径8～10cmの円形である。遺物は土師器が出土している。



第11図　ＳＢ399建物跡実測図

(2) 溝　跡

ＳＤ387溝跡

調査区東端で発見した南北方向の溝跡である。第III層上面で発見した。ＳＤ388･389溝跡、ＳＫ395土壙と重複関係があり、これらよりも新しい。規模は、上幅2.0m以上、下幅0.70m、深さ1.03mである。断面形は半月状で、埋土中には礫を多く含む。遺物は近･現代陶器、かわらけ（第13図１）、白磁（写真図版７－５）、中世陶器、灰釉陶器、赤焼き土器、土師器、須恵器、砥石（第13図４）が出土している。

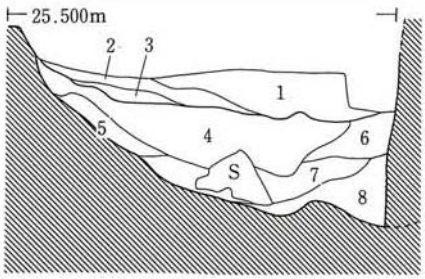
ＳＤ388溝跡

調査区南東部の第III層上面で発見した東に彎曲する溝跡である。約10mにわたって検出した。ＳＤ387溝跡と重複関係があり、これよりも古い。ほぼ同位置で２時期の変遷（Ａ→Ｂ期）を確認している。

Ａ期…上幅1.0～1.6m、下幅0.6～1.0m、深さ0.7mの規模をもち、断面形はＵ字形である。埋土は確認できた最上層(断面図７・８層)では、地山ブロックを多く含んでおり人為的に埋められていることが確認できた。その下層については黒褐色の粘質土、最下層が礫を多く含む灰黄褐色の砂となっている。遺物は、無釉陶器甕、青磁碗(越州窯系)(写真図版７－５)、土師器、須恵器、赤焼き土器、砥石(第13図５)、瓦が出土している。

Ｂ期…上幅1.6～2.5m、下幅0.7m、深さ0.7mの規模をもち、断面形は半月状である。埋土は炭化物を含む黒褐色粘質土が主体をなす。溝の中心はＡ期より少し西に寄る。遺物は無釉陶器甕、かわらけ（第13図２）、土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦、古銭（北宋銭)(第13図６～９)、鉄釘(第13図３)が出土している。

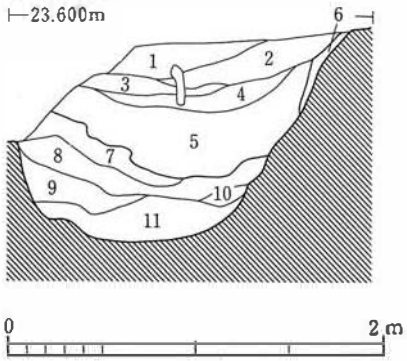
S D387溝跡



土層観察表

No	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	にぶい黄褐色粘土質シルトを含む
3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
4	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	しまりは弱い
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	やや砂質
6	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	やや砂質
7	暗褐色(10YR3/2)	砂質シルト	大形の石を多量に含む
8	オリーブ黒色(10Y3/1)	砂質シルト	大形の石を多量に含む

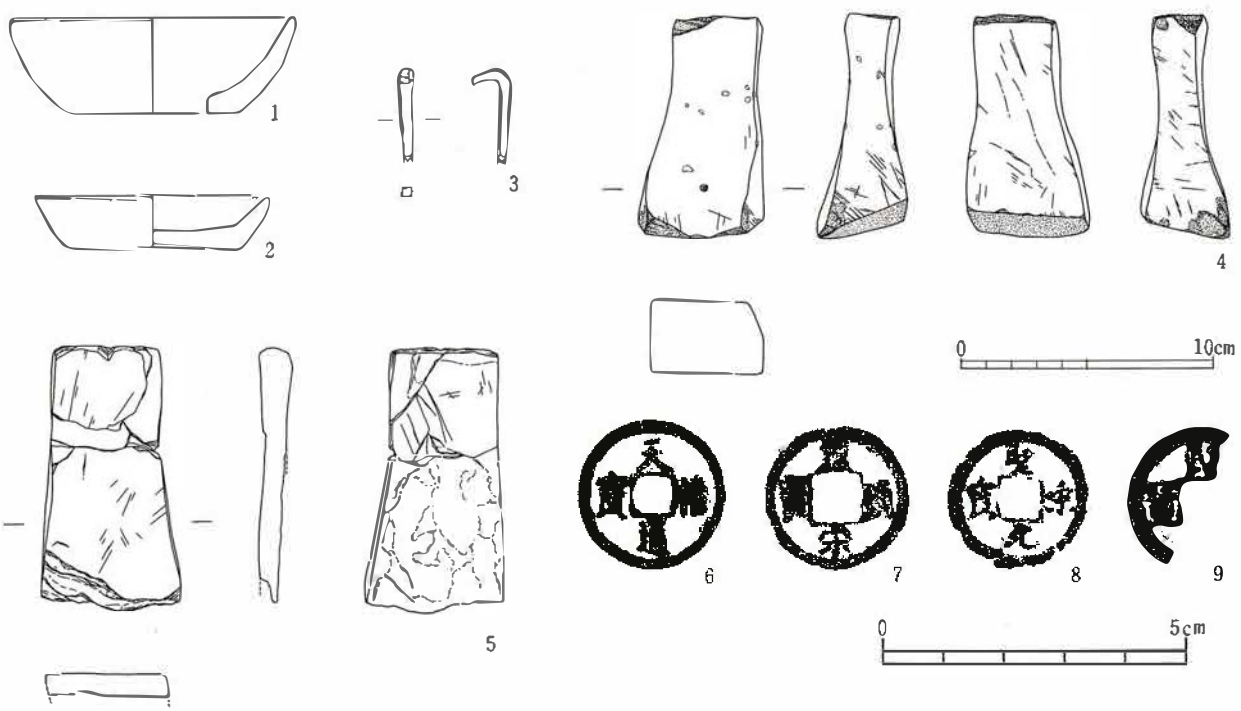
S E 388溝跡



土層観察表

No	土　色	土　性	備　考	時期
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	炭化物多い	B期
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物、マンガン粒を含む	B期
3	褐色(10YR4/4)	シルト	マンガン粒、岩石粒を含む	B期
4	黒褐色(10YR2/3)	シルト		B期
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト		B期
6	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		A期
7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	マンガン粒を多く含む	A期
8	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト		A期
9	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	砂粒を含む	A期
10	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	砂粒を含む	A期
11	灰黄褐色(10YR4/2)	砂	礫を多く含む	A期

第12図　S D387・388溝跡断面図



単位:cm

番号	種　類	器種	遺　構	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	図版番号	備　考	登録番号
1	かわらけ		S D387	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	11.2	6.8	3.8	7-2		R1
2	かわらけ		S D388 B期	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ		6.8	2.1	7-3		R2
3	鉄釘	S D388 B期 / 長さ3.6 / 図版7-9 / R9	4	砥石	S D387 / R93		S	砥石	S D388 A期 / R94		
6	古銭	S D388 B期 / 図版7-7 / 天禧通宝 / R1			7	古銭	S D388 B期 / 図版7-7 / 皇宋通宝 / R3				
8	古銭	S D388 B期 / 図版7-7 / 聖宋元宝 / R4			9	古銭	S D388 B期 / 図版7-7 / R2				

第13図　S D387・388溝跡出土遺物

(3) 土　壙

ＳＫ393土壙

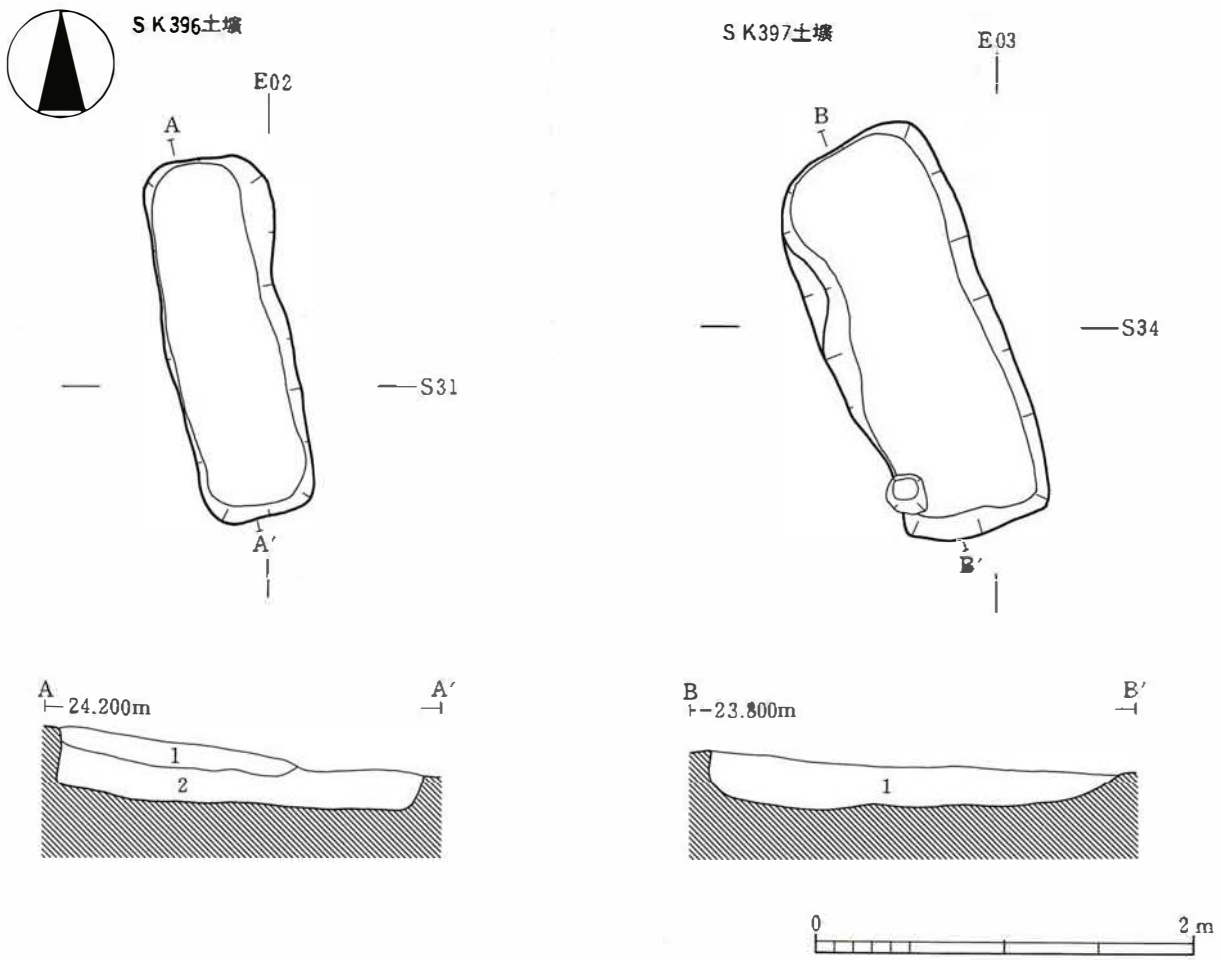
調査区中央部の第III層上面で発見した不整楕円形の土壙である。他の遺構との重複はない。規模は長軸0.75m、短軸0.50m、深さ0.22mを計る。埋土は黒褐色シルトである。遺物は土師器杯・甕、赤焼き土器の小破片が出土している。

ＳＫ396土壙

調査区中央部やや南よりの第III層上面で発見した隅丸長方形の土壙である。他の遺構との重複はない。規模は長軸2.90m、短軸0.70m、深さ0.22mを計る。埋土は暗褐色シルトで第III層のブロックを多く含むことから人為的に埋められたものと考えられる。遺物は土師器、須恵器の小破片が出土している。

ＳＫ397土壙

調査区中央部やや南よりの第III層上面で発見した隅丸長方形の土壙である。他の遺構との重複関係はない。規模は長軸2.20m、短軸0.90m、深さ0.26mを計る。埋土は暗褐色シルトで第III層のブロックを多く含み、ＳＫ396土壙の層と近似することから人為的に埋められたものと考えられる。遺物は土師器、須恵器、赤焼き土器が出土している。



土層観察表

No	土　色	土　性	備　考
ＳＫ396土壙			
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	基本層第III層の土をブロック状に含む

No	土　色	土　性	備　考
ＳＫ397土壙			
1	暗褐色(10YR3/4)	シルト	基本層第III層の土をブロック状に含む

第14図　ＳＫ396・397土壙実測図

(4) その他の遺構

ＳＸ400

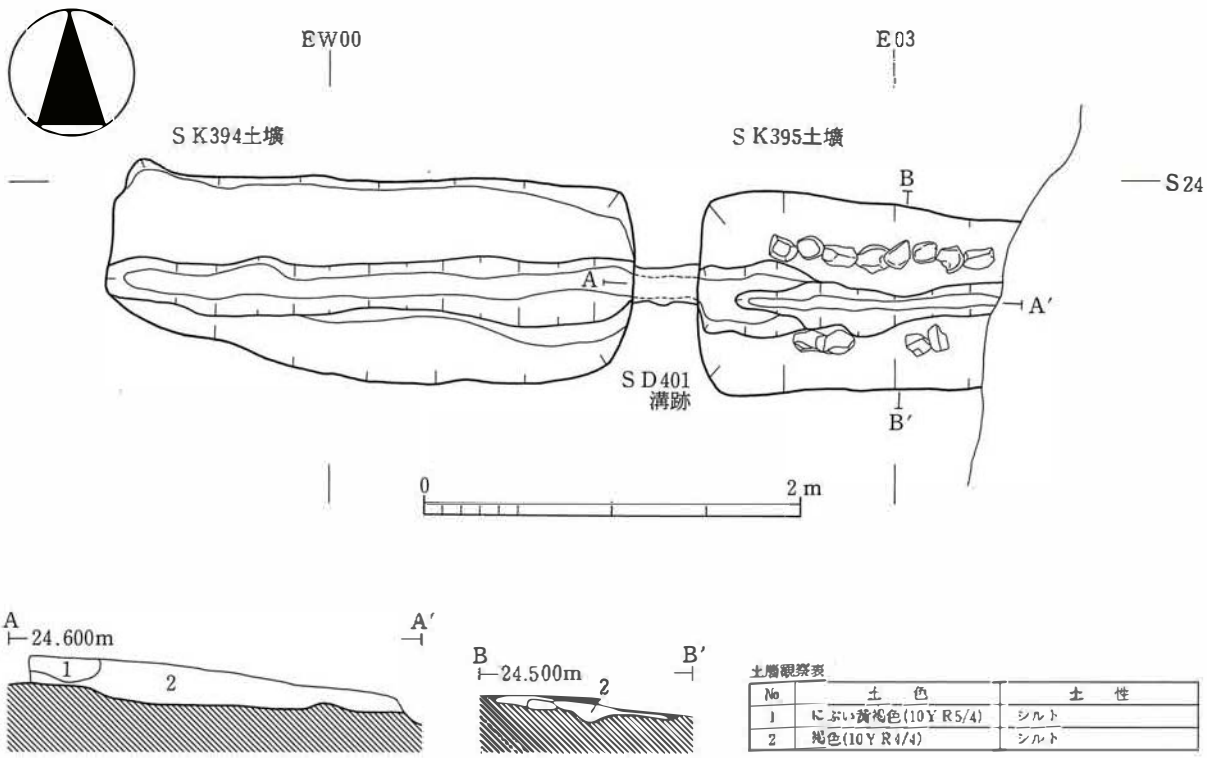
調査区北部の第Ⅲ層上面で発見した遺構でＳＫ394・395土壙、ＳＤ401溝跡からなる。ＳＤ387溝跡と重複し、これよりも古い。ＳＫ394･395土壙、ＳＤ401溝跡の埋土第２層がそれぞれ同一層でつながることから、これらの遺構が一連の遺構であると判断した。なお、ＳＤ401溝跡は埋土第１層が基本層位第Ⅲ層と近似し、ＳＫ394・395土壙と切り合っている状況で検出していることや、第２層がＳＫ394・395土壙の第２層と同一層であることなどからトンネル状の遺構が陥没したものと判断した。以下各遺構ごと説明する。

ＳＫ394土壙

平面形が隅丸長方形の土壙である。規模は長軸2.80m、短軸1.00m、深さ0.22mを計る。埋土は第１層がにぶい黄褐色シルトで第Ⅲ層のブロックを多く含み、人為的に埋められたものと考えられる。第２層は暗褐色シルトでＳＤ401溝跡の第２層と同一層である。土壙の底面はほぼ中央が窪んでおり、東西に細長い溝になっている。遺物は第１層からかわらけ、土師器、須恵器、赤焼き土器が出土している。

ＳＫ395土壙

平面形が隅丸長方形の土壙である。ＳＤ387溝跡と重複がありこれよりも古い。規模は長軸1.50m以上、短軸1.00m、深さ0.21mを計る。埋土は第１層がにぶい黄褐色シルトで第Ⅲ層ブロックを多く含み、人為的に埋められたものと考えられる。第２層は褐色シルトである。底面にはＳＫ394土壙と同様にほぼ中央が窪んで東西に細長い溝があり、その溝の両脇には直径約15～20cmの石が配されている。遺物は第１層から土師器、須恵器、赤焼き土器が出土している。



土層観察表

No	土　色	土　性
1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト
2	褐色(10YR4/4)	シルト

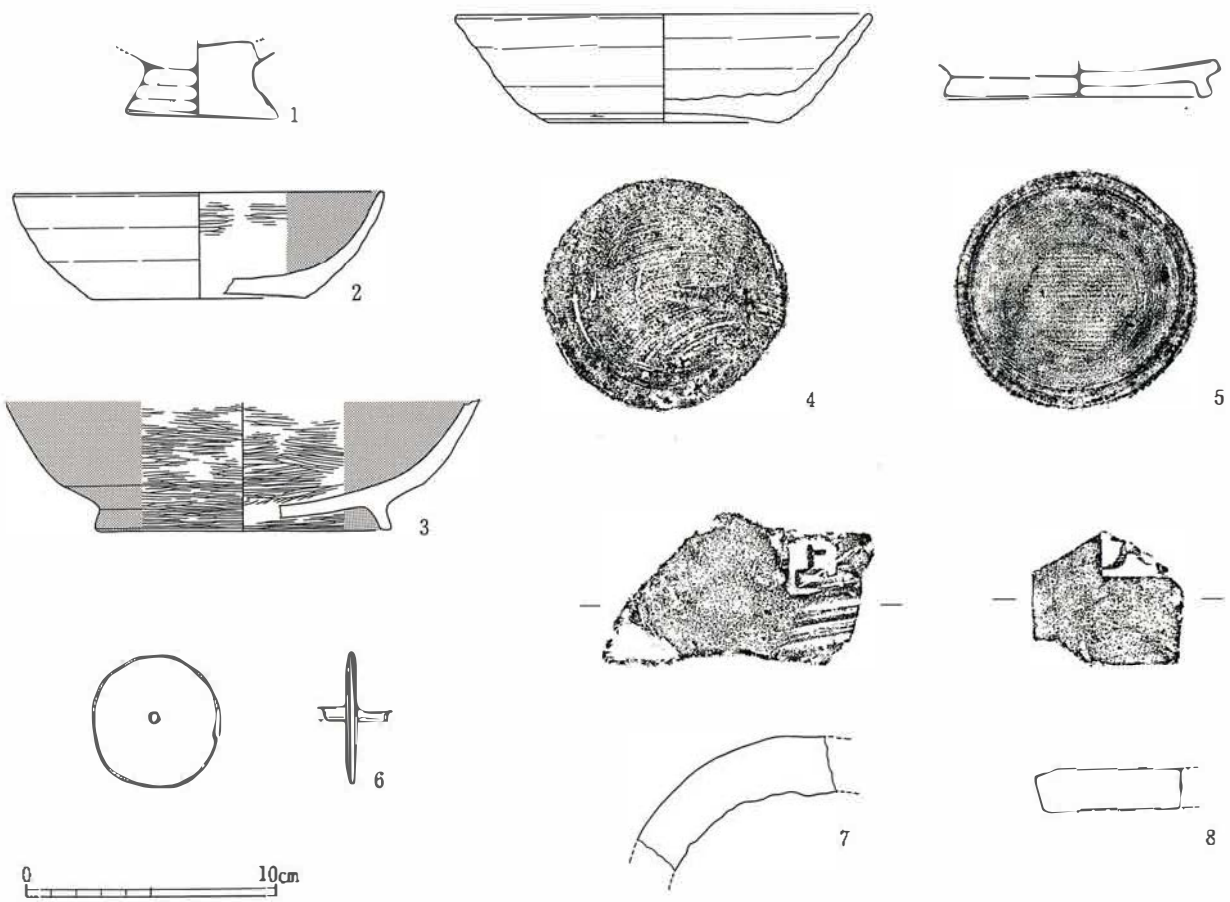
第15図　ＳＸ400実測図

ＳＤ401溝跡

ＳＫ394土壙とＳＫ395土壙の間にある溝跡である。本溝跡の第１層とＳＫ394・395土壙の第１層とに重複関係が認められ、本溝跡の第１層のほうが古い。そして、本溝跡の第２層とそれぞれの土壙の第２層とは切り合いは認められない。規模は、上幅0.21ｍ、下幅0.12m、深さ0.16ｍを計る。埋土は第１層が第Ⅲ層と近似した土で第２層は褐色のシルトである。遺物は出土していない。

遺構外の出土遺物

遺構外から出土した遺物のうち、出土量の多さが顕著なものは基本層位の第Ⅰ層と第Ⅲ層出土の遺物である。前者については破片資料が大部分で、内容も奈良・平安時代から、中世、近・現代にかけての多種多様の遺物が混在している。後者については、Ｂ区南端部のごく狭い範囲で掘り下げた第Ⅲ層下層から全体の器形が推定できる土師器と須恵器が比較的まとまって出土している。両者とも今回の出土遺物だけを見た限りでは、すべて奈良時代の特徴をもつものである。特に須恵器の杯は、底部の切り離し技法が静止糸切りのものが、４点の底部資料のうち３点を占める。なお、第Ⅲ層下層はＢ区の南端付近のみの堆積と考えられ、第Ⅲ層の掘り下げを行なったＡ区においては、赤焼き土器を含む平安時代の遺物が出土している。



単位：cm

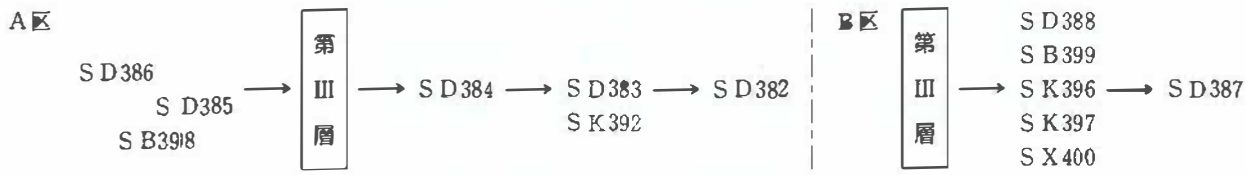
番号	種類	器種	地区層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	図版番号	備考	登録番号
1	赤焼き土器	Ⅲ	Ａ区Ⅰ層	ロクロナデ	ロクロナデ		6.1		7-4	柱状高台	R18
2	土師器	杯	Ａ区Ⅱ層	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理				6-6		R13
3	土師器	杯	Ｂ区Ⅲ層下層	ヘラミガキ・黒色処理	ヘラミガキ・黒色処理	14.7	8.4	4.3	6-7	底面切離し不明	R14
4	須恵器	杯	Ｂ区Ⅲ層下層	ロクロナデ、底部静止糸切り後回転ヘラケズリ	ロクロナデ	18.8	11.8	5.2	6-8	内面に付着物	R15
5	須恵器	高台付杯	Ｂ区Ⅲ層下層	ロクロナデ、底部静止糸切り	ロクロナデ		10.7				R16
6	鉄製紡錘車	Ｂ区Ⅲ層 / 図版7-8 / R7				7	丸瓦	Ａ区Ⅰ層 / 図版7-6 / 刻印「占」 / R87		8	平瓦	Ａ区Ⅰ層 / 図版7-6 / 刻印「丸」 / R86

第16図　遺構外出土遺物

Ⅴ　ま　と　め

今回の調査では、２つの調査区とも掘立柱建物跡、溝跡、土壙等が発見されているが、調査範囲の制限や後世の削平のため全容を知り得る遺構は非常に少ない。また、遺物についても比較的出土量の多い遺構でも、そのほとんどが前時代の混入品であることが多く、遺構の時期を特定できる手掛かりとなる遺物の出土はごくわずかである。したがって、各遺構の具体的な性格や時期等を考察するまでには至れないことから、ここでは今回の調査によって知り得る範囲で、主にその年代を中心に説明することにする。

まず、各遺構の重複関係や基本層位からみた大まかな新旧関係は下表のとおりである。



基本層位第Ⅲ層より新しい遺構のうち、Ｂ区のＳＤ387溝跡は出土遺物から近･現代のものであることが明らかになっている。次に、Ａ区のＳＤ383溝跡、Ｂ区のＳＤ388溝跡、ＳＸ400からは、白磁、青磁、無釉陶器、かわらけ、古銭（北宋銭）等の中世の遺物が出土していることから、この時代の遺構であると考えられる。また、Ｂ区のＳＢ399建物跡も柱穴の形態や規模が、市内の他の遺跡で発見されている中世の建物跡のそれと同様であることから中世に属すると考えられる。これら以外のＳＤ382･384溝跡、ＳＫ392･396･397土壙も、出土遺物等に不明な点が多いが配置状況や他の遺構との関連から中世という大きな時代範囲の中には入れられると思われる。なお、Ａ区のＳＤ383溝跡からは青磁の劃花文碗（龍泉窯系）の小破片が２点出土している。遺物自体は12世紀中頃から出現するもの[1]である。これのみから遺構の具体的年代を特定するには無理があるが、その上限年代を推定するうえでは参考になると考えられる。

次に、基本層位第Ⅲ層に覆われるＡ区検出の２条の溝跡をみると、ＳＤ385溝跡からは土師器と須恵器に混じって破片のため器種は不明なものの赤焼き土器が出土している。このことから、本溝跡出土の土器を多賀城跡出土土器の分類[2]に照らし合わせるとＥ・Ｆ群土器に相当する。さらに、埋土の上層に10世紀前半頃に降下したとされる灰白色火山灰が含まれることから、本溝跡出土土器はＥ群土器に相当し、年代は10世紀前半頃と考えられる。一方、ＳＤ386溝跡では土師器と須恵器がほぼ同程度出土しており、また明確に赤焼き土器といえるものは出土していない。杯類の底部は土師器でみると、回転糸切り無調整のものと回転糸切り後手持ちヘラ削り調整を底部周縁から体部下端にかけて施したものがある。出土量は後者が多い。これらの特徴は前述の分類ではＣ・Ｄ群土器にみられるものである。いずれに相当するかは、Ｃ群土器にみられる回転ヘラ削りによる再調整が本溝跡出土土器では確認できないという点からＤ群土器に相当するかとも考えられたが、個体数がそろっていないためこのことから特定するのはむずかしいと判断した。したがって、年代は両群のそれを合わせた９世紀代とみておきたい。このほか、ＳＢ388建物跡については、基本層位との新旧関係は不明なものの、柱穴の形態等から古代の遺構とみなした。遺物は底部が回転糸切り無調整の土師器の杯が出土している。しかし、特徴的な遺物がこれ１点だけのため建物の年代はおおよそ９世紀以降とだけしておきたい。

---

(1)　山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995

(2)　白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要Ⅶ』1980

調査前の状況（北より）

A区　SB398建物跡・SK391土壙
確認状況（南より）

A区　SD383溝跡（北より）

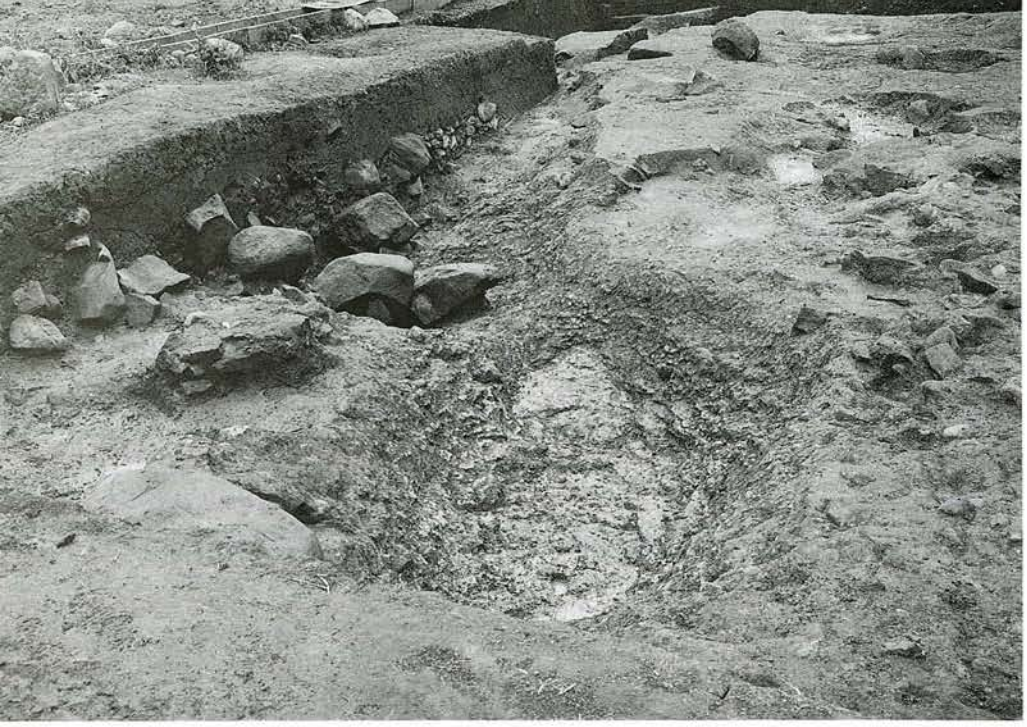
図版 1

A区　SK392土壙（西より）

A区　SK391土壙（西より）

A区　SB398建物跡（南より）

図版2



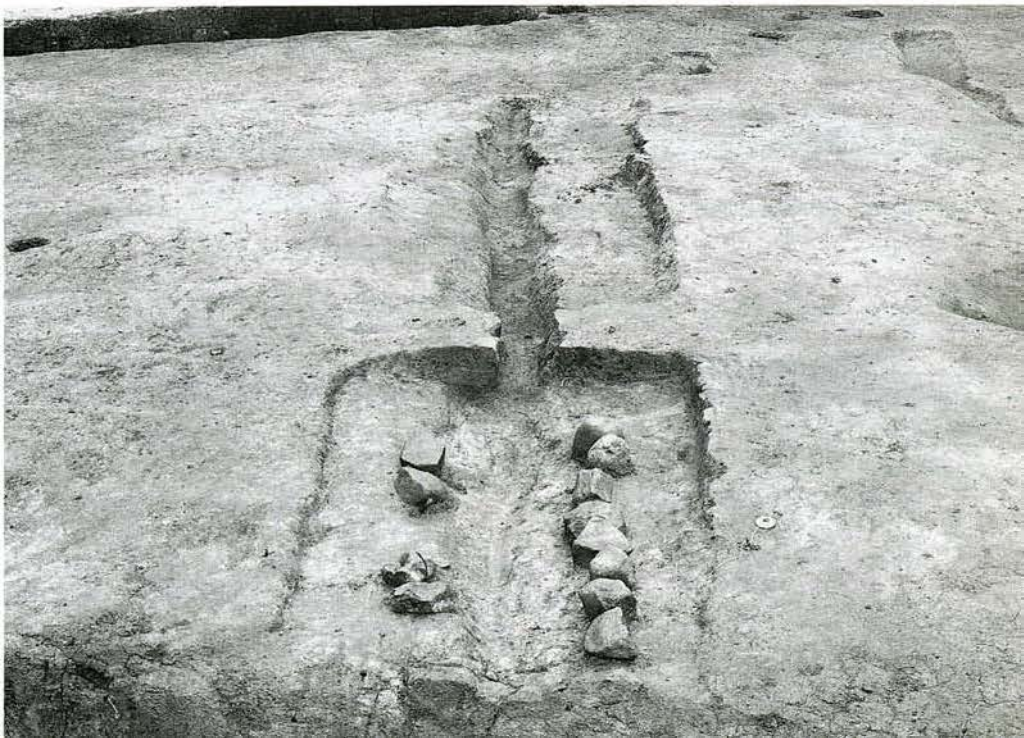
A区　SD385溝跡（北より）

A区　全景（南より）

A区　調査風景（東より）

B区　遺構確認状況（北より）

B区　全景（北より）



B区　SX400（東より）

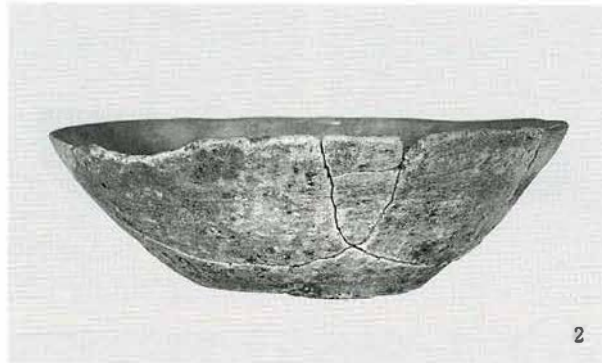
図版4

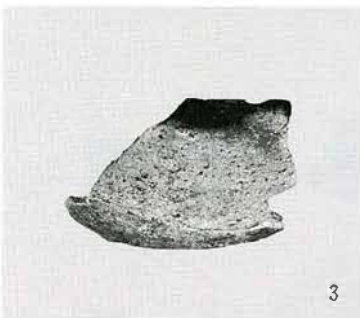
B区　SD388溝跡（北東より）

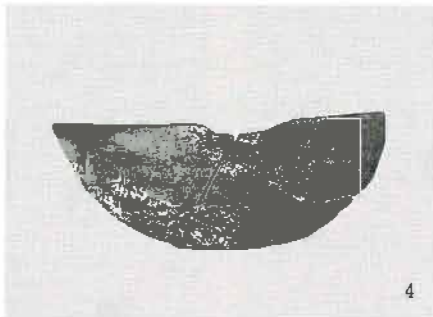
B区　SD388溝跡（南より）

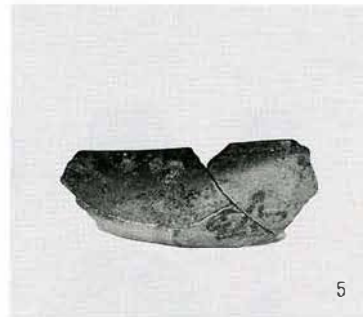
B区　第III層下層
遺物出土状況（南より）

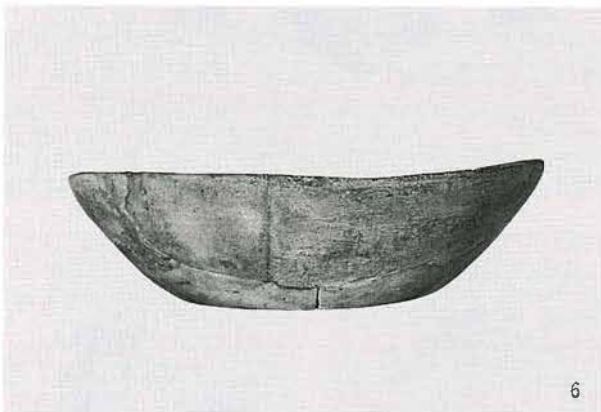
図版5

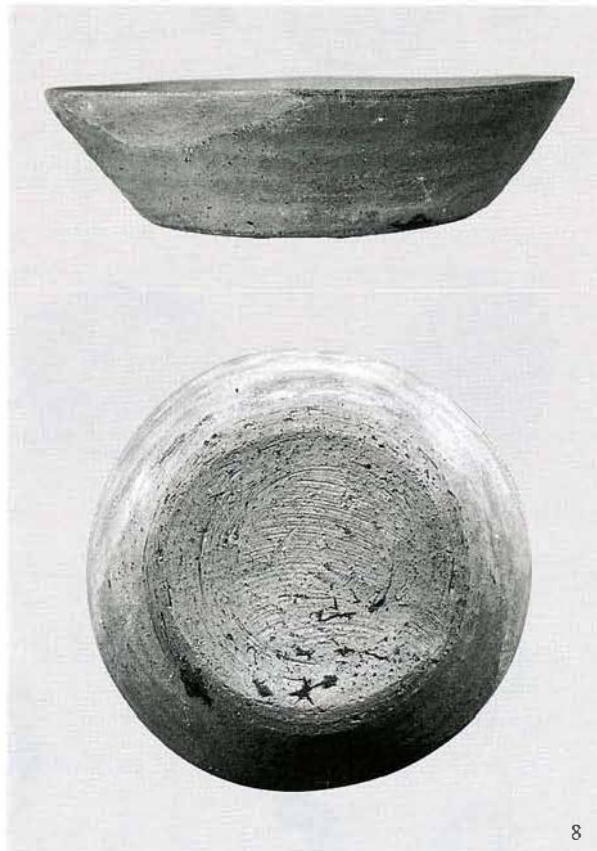






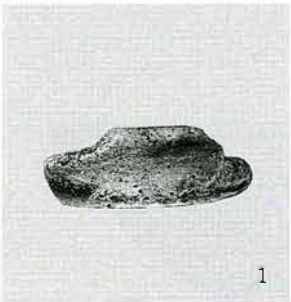


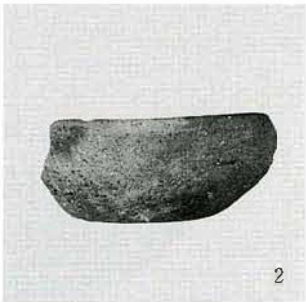


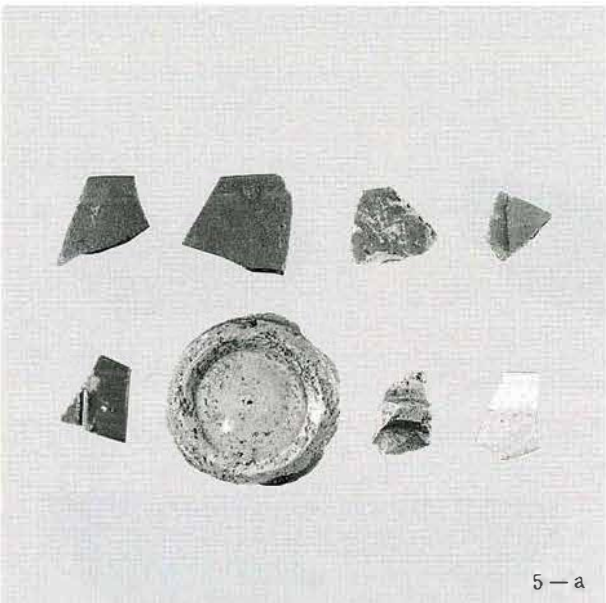


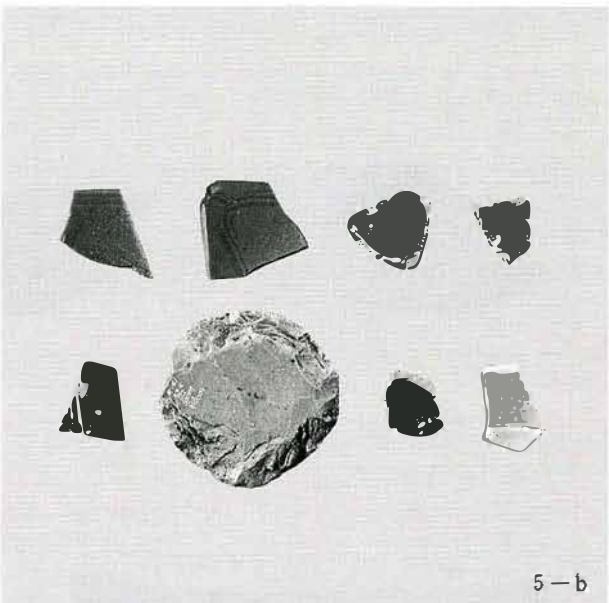
出土遺物

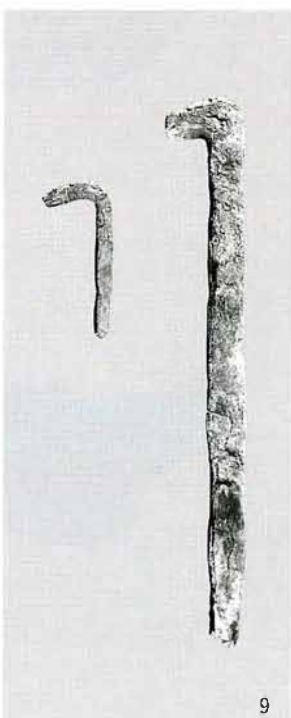
1　土師器　杯（第６図１）
2　須恵器　杯（第８図２）
3　土師器　杯（第８図３）
4　土師器　杯（第８図４）
5　土師器　杯（第８図６）
6　土師器　杯（第16図２）
7　土師器　杯（第16図３）
8　須恵器　杯（第16図４）

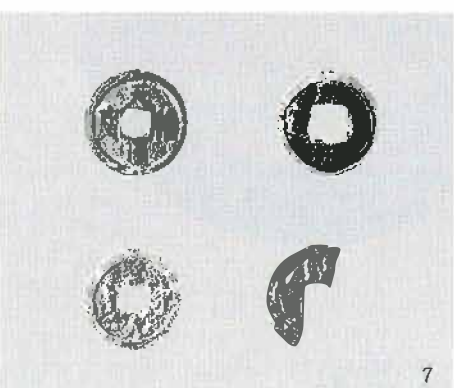


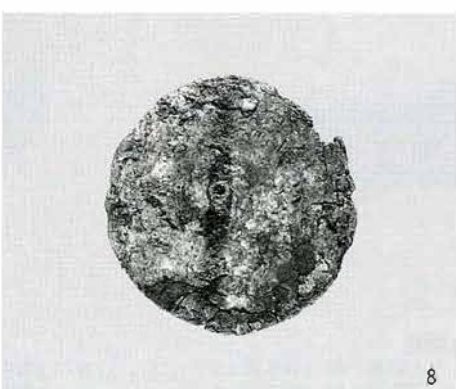












出土遺物

1　かわらけ（第８図１）
2　かわらけ（第13図１）
3　かわらけ（第13図２）
4　赤焼き土器　柱状高台皿（第16図１）
5　ａ青磁・白磁　表（第８図７・８）
　　ｂ青磁・白磁　裏（第８図７・８）
6　左　丸瓦　刻印「占」（第８図９）
　　中　丸瓦　刻印「占」（第16図７）
　　右　平瓦　刻印「丸」（第16図８）
7　左上　古銭「天禧通宝」（第13図６）
　　左下　古銭「聖宋元宝」（第13図８）
　　右上　古銭「皇宋通宝」（第13図７）
　　右下　古銭　（第13図９）
8　鉄製紡錘車（第16図６）
9　左　鉄釘　（第13図３）
　　右　鉄釘　（第８図10）

報告書抄録

ふりがな	にしざわいせき
書名	西沢遺跡
副書名	第4次調査報告書
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第51集
編著者名	石本 敬・鈴木孝行・堀口和代
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27－1
発行年月日	西暦1998年3月25日

所収遺跡(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
西沢遺跡(にしざわいせき) (第4次)	多賀城市市川字伊保石(たがじょうしいちかわあざいぼいし)地内	18	017	38度 18分 11秒	140度 59分 49秒	19970714 ～ 19970912	400㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西沢遺跡 (第4次)	集落	平安 中世	掘立柱建物跡 溝跡 掘立柱建物跡 溝跡 土壙	土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦 青磁、白磁、中世陶器、かわらけ、古銭、鉄釘	

多賀城市文化財調査報告書第51集

西　沢　遺　跡

―第４次調査報告書―

平成10年３月25日　発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番１号
電話（022）３６８－０１３４
発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目１番１号
電話（022）３６８－１１４１
印刷　今野印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町４－５
電話　（022）２８８－６１２３